

黎明

学校番号 045 福岡県立福岡高等学校 鉄道研究同好会

私は、白みゆく東の空から朝日の遍く零れるを見やった。そして、その煌めく朝日はなめらかなクリーム色のこの高架に注がれているのだった。

三年前、まだ高架のない頃、私は箱根駅伝 10 区を走った。10 区はこの蒲田第一踏切を行かなければならないが、列車の運行を止めると非常な影響がある。だから、京急は社員を総動員して列車の通過時間を調節し、ランナーへ最大限の配慮を尽くしていた。しかし、どうしてもランナーが列車の通過を踏切前で待たなければならないことがあった。

——私は止められたのだった。私の前を行くランナーは無慈悲にちっこくなっていった。

しかし、なぜだか怒りや後悔は毫も湧かなかった。寒風を切って行く列車は私の全てを包み込むようだった。遮断機が上がり、私は大勢の人たちに囲まれて晴れ晴れとした気持ちで、走り出した。

そして今、新たな歴史を連れて昇る朝日が、あの日の私もあの頃の踏切も優しく抱きかかえていくのだった。